

白氏文集 二十四 隋堤柳・下

加藤淳平

隋と唐とは、楊氏（隋）と李氏（唐）の違いあれど、帝室互ひに親密にして、律令制度、隋の科擧を始め、唐の續行せる等共通點多ければ、歴史家は「隋唐王朝」とて、一續きの時代と爲す。されど隋煬帝の時代より白樂天の時代まで、二百年を経れば、煬帝の大運河が堤に植ゑたる柳、「盡く衰朽す」。前代の文物を破壊するは、漢土の常なり。されば我らが日本の皇室一統に續き、今も多くの舊慣・古蹟の舊狀を守るを、豈有難しと思はざらんや。尤も我らとて、舊東海道の松樹、多く伐採せられたり。況んや、古來の傳統を「うざつたく」思ひ、それを敵視し、破壊せんとする者多きに於てをや。

隋堤柳・下 隋堤の柳（續）

舟中歌笑何日休 舟中の歌笑 何れの日か休まん

上荒下困勢不久 上荒み下困めば 勢久しからず

宗社之危如綴旒 宗社の危うきこと 綴旒の如し

煬天子 自言福祚長無窮 煬天子 自ら言ふ 福祚長へに窮まり無しと

豈知皇子封鄴公 豈知らんや 皇子鄴公に封ぜらるるを

龍舟未過彭城閣 龍舟未だ過ぎざらず 彭城の閣

義旗已入長安宮 義旗已に入る 長安の宮

蕭牆禍生人事變 蕭牆に禍ひ生じて 人事變じ

晏駕不得歸秦中 晏駕して 秦中に歸るを得ず

土墳三尺何處葬 土墳三尺 何れの處にか葬むる

吳公臺下多悲風 吳公臺下 悲風多し

二百年來汴河路 二百年來 汴河の路

沙草和煙朝復暮 沙草煙に和す 朝復た暮

後王何以鑒前王 後王 何を以て前王に鑒みん

請看隋堤亡國樹 請ふ看よ 隋堤亡國の樹を

（大意）舟の中の歌や笑ひは、いつになれば終るのだらう。上が荒んだ毎日を送り、下が困苦するならば、勢ひは長くは續かない。隋の國自體も王室も、王冠の垂れ飾りのように、ゆらゆらと揺れる。煬帝は、隋の王室の好き運勢は永遠に終ることがないと、自から公言してゐたが、自分の孫の皇子が、隋の王位に就くことができず、唐によって、鄴公に任じられることを、果して知つてゐただらうか。煬帝の龍の舳先の舟が、揚州近傍の彭城の樓閣にさへ到達しないうちに、唐の煬帝討伐の義軍の旗は、もう長安の王宮に入城した。宮廷の中で禍ひが起こつて、人の運命を變へてしまひ、煬帝は殺害されて、王宮のある秦中の地に歸ることができなくなる。三尺の土墳を何處に葬むつたのか、揚州郊外の吳公臺の下には、悲しい風が吹いてゐることが多い。煬帝の死から二百年、汴河の路では、砂の上に生えた草が、朝も夕も靄や霞になじんで來た。前の王たちの、何を鑑みとすればよいかを問ふ後世の王たちよ。亡國の隋が大運河の岸の堤に植ゑた柳の樹を見るがよい。

隋の第二代皇帝煬帝ようたいの名は、非道なる皇帝の意にして、隋の滅びて後、唐の人たちの名付けたる諡名なり。諡名のみならず。唐人の記したる歴史には、名君たりし父文帝を弑せしより始め、芳しからざること多し。客觀的に見れば、淮河より黄河に至る大運河を完成せるは、大いなる功績なれど、三次の高句麗遠征の敗戦、度重なる國內巡遊、最後に其の途次の、江都揚州に於ける「佚遊」と死等、後世に少からざる批難あり。こは、隋の亡國を憫れむ詩なり。

隋堤柳・上

隋堤の柳・上

憫亡國也

亡國を憫れむ也

隋堤柳 歲久年深盡衰朽

隋堤の柳

歲久しく年深くして

盡く衰朽す

風飄飄兮雨蕭蕭

風は飄飄として 雨蕭蕭たり

三株兩株汴河口

三株兩株 汴河べんの口

老枝病葉愁殺人

老枝病葉 人を愁殺す

曾經大業年中春

曾て經たり 大業年中の春

大業年中煬天子

大業年中 煬天子

種柳成行夾流水

柳を種う系行を成して 流水を夾はさむ

西自黄河東至淮

西は黄河より 東淮に至る

綠影一千三百里

綠影 一千三百里

大業末年春暮月

大業の末年 春暮の月

柳色如烟絮如雪

柳色烟の如く 絮雪の如し

南幸江都恣佚遊

南江都に幸して 佚遊を恣ほしにす

應將此柳繫龍舟

應まさに此の柳將て 龍舟を繫まぎたるべし

紫髯郎將護錦纜

紫髯の郎將 錦纜を護る

青蛾御史直迷樓

青蛾の御史 迷樓に直す

海内財力此時竭

海内の財力 此の時竭つく

(大意) 隋の煬帝が掘鑿した大運河の岸の堤には、柳が植樹されてゐたが、長い歲月が經ち、柳は古木となつて、すべて衰へ朽ちてしまつた。今風が飄飄と舞ひ上がり、雨が蕭蕭と降るのは、汴河との合流點の堤の上にやつと残つた二、三株である。枯れかけた枝やわくら葉は、見る人を悲しみに堪へられない思ひに沈ませるが、此の柳も、曾ては煬帝の大業年間の春を生きたのであらう。彼の大業年間に煬帝は、大運河の流れを夾む兩岸に、柳の竝木を植樹し、綠の柳竝木が、西は黄河から東は淮河まで、千三百里續いてゐた。その大業の年號の最後の年、春が暮れんとする晩春の月、柳の色は烟りのやうに煙り、柳絮は雪のやうに風に飛んでゐたに相違ない。煬帝は北の帝都から、江都と呼ばれる揚州の町に来て、常軌を逸した遊興に耽けた。此の時、舳先に龍の飾りの附いた煬帝の乗り舟は、岸の柳の木に

纜ともじなを繫いだことだらう。その錦の纜を繫ぐ指揮官は、紫あごひげの髻の將官、揚州の郊外の宮殿の迷路には、美人の女官たちが日夜侍つてゐた。煬帝はこんな遊興に日々を送り、國の財力を費ひ果す。

(平成二十九年十月十日受附)